

歌はちから 歌はたから
—古今集にない後撰和歌集の魅力—

お茶の水女子大学名誉教授 平野由紀子氏

タイミング良く、新型コロナにたいする規制がなくなって間もない5月13日、東京支部で古典講座（古今和歌集）を3月まで担当していただいた平野先生に、ご専門の「後撰和歌集」の魅力について、共に歌を読みあげながら、存分にお話していただきました。会場にはかつての先生の教え子の方々なども多くみられ、講演がおわった後もお話が弾んでいっしょにしました。

〔講演内容〕

古今和歌集（905年）は最初の勅撰和歌集であり、全20巻。四季・恋・雑（ぞう）・などの歌が整然とならんでいて、後の勅撰和歌集はこれを踏襲しているのに、古今和歌集からおよそ半世紀あとに編纂された後撰和歌集（951年）は、その分類法や詞書の書き方など、雑然としていて未完成ではないかと疑われてきました。

しかし千年来の謎は、どんな和歌を選び入れるかという撰集対象の相違によると考えられます。後に主流となる「題詠」ではなく、当時の人々の生の声が聞こえる後撰和歌集の魅力を楽しんでいただきたい。

I 【恋の歌について】

○当時、求愛は、まず男性が女性に和歌をおくることから始まる。

○しのお恋。表に出せず心の中で激しく求めている、それが抑えきれなくなってこの思いをあなたに知っていただきたい。こういう和歌を詠んでおくる。

- | |
|--|
| ① あしひきの 山下水の 木隠れて たぎつ心を せきぞかねつる (古今集 491) |
| ② 逢坂の 関に流るる 岩清水 いはで心に 思ひこそすれ (同 537) |
| ③ 浅茅生の 小野の篠原 しのぶとも 人知るらめや 言ふ人なしに (同 505) |
| ④ あさぢふの 小野のしのはら しのぶれど あまりてなどか 人の恋しき
(後撰集 577) |

○ 下の句はどれも自分の心についての文脈。

- ① たぎつ心をせきぞかねつる→ 沸き返るような激しさを堰き止めることができなくなりました。
- ② いはで心に思ひこそすれ→ 言葉に出して言わずに、心の中でお慕いしていたのに。
- ③ 忍ぶとも人しるらめや言ふ人なしに→ 表に出さないように抑えてきましたが、あなたはご存じない、誰も告げる人はいないのだから。
- ④ 忍ぶれどあまりてなどか人の恋しき→じっとこらえてきましたが、こらえきれません、あなたが恋しくてなりません。

○ 上の句は自然界の景についての文脈

- ① 山下水・木隠れて・たぎつ
- ② 逢坂の関・流れる岩清水
- ③ 浅茅生の小野・篠原
- ④ 浅茅生の小野・篠原

★上の句は人々が共有するようだ。

現代の詩歌のように独創性をやかましく言わない。

(注 1)

II 【贈答歌】

○古今集は一首一首が鑑賞されるのに対し、後撰集では歌は「人と人との会話」であり、「手紙のやりとり」である。

先ほど引用した①は、後撰集では以下の⑤のように、男の歌と女の歌が一組として掲載される。

⑤ あしひきの山下水の木がくれてたぎつ心をせきぞかねつる (後撰集 860)

返歌

⑥ こがくれてたぎつ山水いづれかは目にしも見ゆる音にこそ聞け (後撰集 861)

男の歌⑤は男の求愛の歌として前述のように「沸き返る心を、せき止められない」と訴え、古今集でも後撰集でも同じだが、後撰集には女の返歌⑥がある。どういふものか。

女の返歌⑥は男の歌を素直に受け入れる態度とは正反対のかたちをとる。

⑥たぎつ山下水と言っても、どれだけ溢れる量なのか目で確かめられませんわ、水の流れる音だけはきこえますけど。

男の歌は愛の深さ、沸き返る思いの強さを訴えても、女の歌ではそれを信じることができ

ないと否定する。

歌を贈っても返事がもらえない、周囲の女房に代筆させる、親が代筆する、などあって、ようやく返事がもらえたとしてもこのようにつれない。

どんなにつれなくされても、男は熱意をもって再度和歌をおくる

現在、和歌研究者たちは、「贈歌」（ぞうか）、「答歌」（とうか）と言う。恋人間の贈答歌は、おもしろいことに「歌による格闘」とまでは言わなくても「言い合い」の型がある。時には和歌二首だけではなく、四首、六首と、さらに続くのである。

男の誠実さを女はこの歌で知ろうとする。

●男は訪ねて女の家に行くが、たやすく中に入れてもらえない。

まだ会はず侍りける女のもとに、「死ぬべし」といへりければ
返事に「はや死ねかし」といへりければ、またつかはしける

⑦ おなじくは君とならびの池にこそ身を投げつとも人に聞かせめ（後撰集 855）

○「私と会ってください」と懇願する男にたいして女はつれない。

「苦しくて死んでしまいそうです」と訴える男。それに対して女の返事は「はや死ねかし」、すなわち「そうなさい」というのである。

○それであきらめてはいけない。男はさらに歌を贈る、

同じことなら「あなたと並んで池に身を投げた」と人に聞かせたい。

女の心を動かすまで、男の歌はあきらめない。

●女のもとに訪れてもむなしく帰る、そのわびしさを紀貫之が詠んでいる。

女のもとにまかりたりけるを、ただにて返し侍りければ、言ひ入れ
はべりける

つらゆき

⑧ うらみても身こそつらけれ唐衣きていたづらにかへすとおもへば

（後撰集 660）

○女のもとを訪れた紀貫之は、中に招き入れてもらえず、むなしく帰された。その時この歌を人を介して邸の中に伝え入れた。

うらみてもみこそつらけれ唐衣・・・身につけた「からころも」すなわち「衣」の縁語

「裏」、「身」、「着て」、「返す」という語がちりばめられている。第二句からの「きていたづらにかへす」は今の情けない自分への仕打ち・・・「来て徒らに帰す」なのであるが、それは自分の身が拙いから、と言う。その文脈は「恨みても身こそつらけれ」。その「身」は「我が身」であり、それには「みごろ」などという衣の縁語「身」が重ねられている。

○決して相手を非難したり、ましてや怒声をあびせる、捨て台詞を言うなどという行動には出ない。自分の身が拙い、未熟なためだというのだ。今回、この紀貫之の和歌を再読して、心打たれた。

このように恋する男は女の心を、歌によって、ひきよせようとする。

歌は相手の心を動かす力があると考えられていたのである。

後撰和歌集の男の歌を読むと、気の毒になる。必死に訴えるのに女はすげない返事を与え、からかう態度も少なくない。しかし、男はあきらめず、女のもとに歌を贈り続ける。

● 男の願いが聞き入れられても、ふたりの共寝のあとは、まだ暗いうちに男は帰らなくてはならない。暁の別れは男女にとって身を割かれる思いだった。そして帰宅するやいなや男は女に和歌をおくる、それが礼儀であった。

人のもとより帰りてつかはしける	つらゆき
⑨ 暁のなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや	(後撰集 862)
返し	よみ人しらず
⑩ おきてゆく人の心をしらつゆの我こそまづは思ひきえぬれ	(同 863)

男の歌⑨は、「暁というものがなかったら、どんなによいだろう、暁につらい別れをしなくてよいのに」というもので、朝早く草には露がおく中、帰る男の女への恋しさを伝える。きぬぎぬの歌という。

この⑩の女の返歌は、先の、求愛されても会わない期間のものとはちがひ、「起きて帰るあなたのお心はわかりませんが、わたしこそ死にそうにつらいのです。」と言う。

「思ひ消ゆ」とは思い沈んでいること。白露の「しら」は「知らず」を導く。女の返歌は「置く」「消ゆ」という「白露」の縁語で、別れのつらさを充分相手に伝えている。

●このような求愛の男女のやりとりは、身分の高い低いに関係なく、当時の男女の間に広く見られるのである。

○ 生まれた子どもは妻の家で育てられる。

●女の歌も男の心を動かす。

結ばれたあと、男の通いが途絶えがちになる。当時は多妻婚なので他の女のもとに通うのは非難されることではない。

訪れが間遠になる、来なくなる場合、女は歌を贈る。

⑪ 秋風の吹くにつけても訪はぬかな荻の葉ならばおとはしてまし (後撰集 846)

○荻の葉に秋風が吹くと、そよそよとかすかな音がする、男の訪問を「おとづれ」と言った。男の訪問を促すのも女の和歌なのである。

● 割愛するが、女の哀切な恋歌も数多い。

○男が通わなくなってその二人の関係は絶える。しかし、しばらくして和歌が男から来て、男が訪れることもある。

もうめったに来ない男から、「今晚そちらに行く、門を締めないで待っててくれ」と言ってきた。ところが男は来なかったのでおくれた歌というのが(後撰集 1005)にある。男の通いのとだえがそのまま別れであるのか、復活するのかわからない。結ばれた男女の諸相が後撰集には書き留められている。

●また、若くして妻の亡くなった場合、次のような歌がある。

助信が母、みまかりてのち、かの家に敦忠朝臣のまかりかよひけるに、
さくらの花の散りけるおりにまかりて、木のもとに侍りければ、
家の人の言ひいだしける 　　よみ人しらず

⑫ 今よりは風にかかせむ桜花散るこのもとに君とまりけり

返し 　　あつただの朝臣

⑬ 風にしも何かまかせむさくら花にほひあかぬに散るはうかりき

(後撰集 105・106)

これは藤原敦忠(906—943)の子、助信を生んだ妻が亡くなったあとのこと。生まれた子は妻の家で育てられる。妻が亡くなって、夫の訪れがなくなることもあった。それは非難されることではなかった。

敦忠は亡き妻の家に、桜の散るころ訪ねてゆき、その桜の木の下にいた。家の中から、⑫の歌が召使によって伝えられた。「言ひ出だす」は、外の人へ、家の中の者から、歌や言葉を女房などをなかだちにして伝えることである。

桜の散る木の下にたたずむ敦忠に対し、下の句は「散る木のもとに君とまりけり」という。「木の下に」は「子のもとに」と同じ響きだ。母は亡くなっても「子のもとに」あなたは変わらず来て下さっている、と感謝を伝えている。亡き妻の母か乳母か、女房たちか、若くして亡くなった妻の一族の誰かであろう。

敦忠は⑬を返した。

桜花の散ったことへの無念さ。「匂ひあかぬに散る」——もっともっと見ていたいのに散ってしまった桜を惜しむ心から、贈歌の「風にまかせむ」に同意しないことを表明する初・二句すなわち「風にしも何かまかせむ」とする。妻を亡くした無念さ。

III 【婚姻居住について】

平安時代の婚姻について長らく誤って理解されてきたことがある。

世界のあらゆる文化、民族、において婚姻習俗があるが、婚姻の定義として、以下の三点がある。

- 1) 男女の継続する性的結びつきである。
- 2) その社会が認めている関係である。
- 3) 婚姻の両方の当事者による家族的責任の承認。

こう定義することによって不倫とか一時的な恋愛は排除される。

地球上の人々の婚姻に、以下の四種類がある。新しく結婚した男女がどこに住むかによって分ける。

- 1) 夫方居住（おとがた きよじゅう）・・・夫の育った家に住む
- 2) 妻方居住（つまがた きよじゅう）・・・妻の育った家に住む
- 3) 新所居住（しんしょ きよじゅう）・・・どちらの家でもなく新しい家にすむ
- 4) 訪婚（ほうこん）・・・生涯一緒に住まない

文化人類学の知見をはじめ、これまでの地球上の男女の婚姻をこのように分類すると、平安時代の婚姻は2)、3)、4)はあるが、1)の夫方居住は見当たらないのである。

後の時代、例えば、戦国時代、江戸時代、近代（明治、大正、昭和のいわゆる戦前）いずれも夫方居住であるので、漠然と平安時代もそのように考えるようだが、平安時代には夫方居住は皆無である。

その本質は父子不同居。すなわち結婚した息子が自分の父と同居することはないのである。

言い換えれば、結婚した女が、夫の親と同じ邸に住むことはないのである。

高群逸枝の『招婿婚の研究』はさまざま批判されてきたが、律令という古代中国の制度を導入した日本において、漢字しかなかった奈良時代以前ではなく、仮名作品の残る平安時代においては父子不同居の実態が明確に記されている。

一方、日本に多大な影響を与えた古代中国の婚姻は、夫一人に対して、一人の正妻がおり、複数の妾が同じ邸に同居している、一夫一妻多妾制といわれる。その同じ邸に妾と正妻が住む環境では、正妻は隔絶した存在であり、すべての妾たちは夫に仕えると同時に正妻にも仕えなくてはならない、さらに妾の産んだ子どもはすべて、正妻の子となる。

これに対して、平安時代の結婚は男が女の家に通う。そこは妻が生まれ育った家であり、子どもはそこで育つ。妻たちはそれぞれ自分の家に住む。邸は男子に譲られない。娘に伝領される。夫は他の妻の家に行くことは普通であり、非難されることではなかった。だが、男の通いを待つ女の苦しみ、悲しみは和歌に刻まれている。

人の心を千年も後の読み手に伝える歌はたからという他はない。

★（注1）例えば

逢坂の関に流るる岩清水 言はでしもこそ恋しかりけれ （古今和歌六帖 2649）

と言う歌が、「古今和歌六帖」にある。これは10世紀後半には成立していた歌集で、万葉集、古今集、後撰集から歌を多く採っている。

また

心にはしたゆく水のわきかへり 言はで思ふぞ言ふにまされる （古今和歌六帖 2648）

など自然界の景の同じ文脈がここにもある。人々は自由に使っているのだ。

11世紀の枕草子や源氏物語には「古今和歌六帖」の歌を踏まえている表現が少なくない。お茶の水女子大学附属図書館のE-bookサービスのWEBで、全注釈が刊行中である。六帖のうち四帖まで公開されている。パソコンがあれば、世界のどこからでも無料で閲覧でき、ダウンロードできる。

「古今和歌六帖全注釈」 <https://www.lib.ocha.ac.jp/e-book>

（以上の講演内容は、平野先生ご自身がまとめてくださいました。）

参考文献

徳原茂実（とくはら しげみ）著 『後撰和歌集』 明治書院 2022 年
高田祐彦（たかだ ひろひこ）訳注 『古今和歌集』 角川ソフィア文庫 2009 年

婚姻居住については、以下に。

高群逸枝『招婿婚の研究』 講談社 1953 年

ウィリアム・マッカロウ「平安時代の婚姻制度」1967 年
同志社大学人文科学研究所『社会科学』栗原弘訳 1978 年 12 月 によった。

原著は Japanese Marriage Institutions in the Heian Period
William H. McCullough
Harvard Journal of Asiatic Studies、Vol,27,1967

胡潔『平安貴族の婚姻慣習と源氏物語』 風間書房 2003 年
同 『律令制度と日本古代の婚姻・家族に関する研究』 風間書房 2015 年